

# pen

with New Attitude

4/1

2013 No.333

特別定価 650  
yen

いま体感したい、

世界の名建築  
最新ベスト

アイデアがいっぱい！  
自分サイズの家づくり。

20



# 創造の現場。

写真・ベンジャミン・リー photographs by Benjamin Lee

75

グリマネサ・アモロス アーティスト

文藤森愛実 コーディネイトとさよりのりこ

## 祖国ペルーが、NYで光のドロローイングに昇華。

ソーホーの南、トライベックにスタジオを構えるグリマネサ・アモロス。ビルの上り口では、天井に設置されたライト・スカルプチャーがお出迎え。泡をつなげたようなドーム形のオブジェがやわらかな光を放っている。

5階の彼女のスタジオを埋めるのは、空間のドロローイングともいえるべきチューブの曲線だ。そのチューブの中を幾千もの光の粒が膨らんで消えていく。キネティックでオーガニック。微かに色を帯びた光によって、曲線は7色の光の饗宴を生み出す。

「コンピューター制御の発光システムは、設置場所や人の動きを考慮して組

み立てます。スタジオはラボみたいなので、ここにあるのはモックアップ。実際の作品は、高さ5mはあるかな」完成作は、昨春秋、メキシコ市内の彫刻ホールに恒久設置された。

「チューブの材質はポリカーボネート。ガラスより丈夫で、しかも柔軟性がある。中の光は発光ダイオードだから、ほら触ってみて。冷たいまま」

触ったり、中を歩いたり、鑑賞者が親しみやすいアモロスの作品は、水にも強く、野外展示に打ってつけ。建築家との共同プロジェクトにも積極的だ。

ペルー出身のアモロスは、1980年代半ばにニューヨークに来了。当

初、絵が中心だったが、いまの広いスタジオに移り、立体制作の夢が実現する。が、出産と子育てでアートから遠ざかり、2001年の9・11事件では、一時スタジオ脱出を余儀なくされた。

その間、故郷を旅したことが転機となる。アンデス山中チチカカ湖に残るトトラ葦の浮き島、朝焼けから日没まで変わることのない透明な光。そんな祖国の環境に刺激された。最先端の素材や技術を追い求めながらも、「自分に最も近いもの」を表現していきたいという。ニューヨークのスタジオで生まれる光のドロローイングには、アモロスの核が脈打っている。



Grimanesa Amorós

●1962年ペルーのリマ生まれ。84年からニューヨークを拠点。2011年ベネチア・ビエンナーレで発表した光の彫刻で話題に。12年イッセイミヤケNY店で展示。5月のアートバーゼル香港で新作発表予定。www.grimanesaamoros.com

「ウアンチャコ」と題された作品のマケット(模型)。切れ目のないポリカーボネートのチューブは特注品。細い曲線に、チチカカ湖に群生するトトラ葦のモチーフが重なる。



